

新報

行發日二十二月二十
刊休日翌日祭曜日
江風吹水雪崩騰
山月入松金波碎

潮聲俳座 其ノ四

伊坂香雨翁喜壽記念俳句

掛香の女隠密にてありき
蒙古勢呑んで梅雨晴る香推濁
酒の香のみなざる花の松ヶ岡
加
葉の香や編む雪香も慰問品
高久晩霞
五 客
天が下香に酔ふ菊の佳節哉
春宵一刻香燭はし餘念なき
雨一過月も心もすむ夜哉
寂として時雨聞く夜となりけり
蝸牛晴雨悠々自適哉

三光逆 位
蘭の香に縁高く住む翁かな
白糸の香にたぐり冠木門
香ひ濃き菊大輪のいほり哉
生天目十里塚
五 客
東風吹くや城の香りの句ふ花
天高くみざる菊のかほり哉
旭を受けて菊一鉢の香かな
香しく床しく冬の牡丹かな
菊の香や雨に灯す金屏風
三光逆 位
名月の香るはかりのひかりかな
萌えいつる春の色香や初若菜
風に舞ひ雨に落付く一葉哉
中曾根遊郎撰

五 客
寂として時雨聞く夜となりけり
其師のいさかひ寒し年の市
行き暮れて香いたより梅の宿
茶山花に花し雨の幾日哉
遠山の見え居て時雨あけり
三光逆 位
色や香や花なき頃の翁かな
長月のあらん限りや菊香る
寒梅の鉢置き替るる小春哉
安島舟撰

五 客
雨の雁夕空低く渡りけり
春の雨位し暮るる山の宿
讀みふけて芭蕉に雨を聞く夜哉
茶の花のこぼれて雨の音もなし
東洋 江亭 江亭 江亭 江亭
松堂 松堂 松堂 松堂

五 客
大に爲す處あらんとする青年は須く快活な
るべし、快活は心の快晴なり。その心快晴
なる時は多くの困難にも打ち克つ事を得ん
若し憂鬱の陰雨降り續かば意氣銷沈して進
取の力を弱むべし、一旦の蹉跌に失望し、
落膽して憂鬱に陥り世を夢むが如きは人生
の春とも云ふべき青年に似合しからず。
(青年の希望)

五 客
初冬 雑詠
名月やありこぼす竹の雨
紫陽花や明るく晴るるひの雨
日溜りに水仙の香の和みけり
東洋 江亭 江亭 江亭
松堂 松堂 松堂 松堂

五 客
高井 觀音
ふだらくの恵みの米に會はまくと拜がみまつれ觀
世音菩薩
天龍夜叉諸鬼畜生も救はせ給ふ大さみ光は觀世音
菩薩
童男童女のまだいとけなき心こそみ佛なれや觀世
音菩薩
縁ありて高井觀音の調査しつづ古き寫經を得つる
うれしむ
田舎家の煤びし染にゆらゆらと搖るる灯を燈をよ
む吾に

拈華微笑
人の奇蹟的武運
我が此の粗製濫造を眞つ直に、大塚へ掛つ
造りたて思ふ時、フト垂れ
を上げて見ると、何うやら
大塚とは違つた方向へ飛ん
で居るやうに思はれるので
豆を煮るやうな
ても鼻につかぬ
生煎を暗黒にす
て動く帝國軍 艦隊を急ぐも良
無いと存する、寧ろ此の際と呼ぶものではござらぬ
本然の女に返らぬが宜しか横ハ、ア既に夫れを
くはあるまじからん心は只存じか、友の話しに大塚
管轄する最前より兩腕を組邊に居住する云ふ、又本
んで只々考へて考へて考へて大塚であるが御附から
横之進 橋寺西氏、花井先母が來てゐる、岩附と名乗
生のお話しに依つて我等ならば母方の苗字を唱へる
ト胸に浮かんだ事がある此ものでござらう長「扱
頃友達が來ての話しに、大塚は……長兵衛早くも我師
野時右衛門の次男息子の時の花房権右衛門を殺した奴
次郎……時次郎と云つては、岩附時次郎の大野藤市
お判りに成らぬかも知れぬに相違ないと思つた、併し
幼名を藤市と云つた、宮本仇討の事などには一向関心
ない

正誤 昨紙本欄 三光逆では迄の次第を悉く物語り
位對山は對山人の。三光逆自分全く女であり、舊主加
江亭の「うれし羽術」は翁菊藤式部少輔の詮議を避くる
五客紅箋の、「羽の園」は翁菊藤式部少輔の詮議を避くる
の園の何れも誤り
忍んでゐるが、堀主水の落
とし風なることを打明けま
八三三 △冬至△小ピット英
首相となる(一、七
△八三三 △初めて内閣
を致す、伊藤博文内閣總
理大臣(宮内大臣を兼)に
任せられ、内務山縣有朋
外務井上馨、大藏松方正
義、司法山田顯義、文部
森有禮、農商務谷城、
逓信樺本武揚、陸軍大山
巖、海軍西郷從道等に
て所謂第一次の伊藤内閣
也(明治一八)

講談
女長兵衛
東京 斯波南更
(魚崎湖書)
長兵衛は昔より仕方がない
今までは甘く男に化負ふせ
たが、寺西関心女と見做
たが、態と難題を持たんだ
と思つた、殊に寺西関心
野崎横之進も會津浪人とい
云へ恩將暗君たる式部少輔
の志をつぎ、堀主水一家の
ものを根絶やしに仕様など
決して恐るるに足らぬ義
、考へてゐる人物で無い
事を知りましたから、此處
を狭めてをられるは正

武藏の流れを汲み、神免二にも慎之進にも話しをしな
刀流を可なり使ふ、劍術はい、話せば必ず助太刀でも
甘い彼奴が得意の仕様と云ふに違ひない、事
亂暴者、藤本丈右衛門の親面倒だと思つたから其事を
類だけ、御城代が家老を深言はず、自分が女であり堀
く恨み堀さへ無かつたら主水の娘と云ふ事は堅く口
は加藤の家があ、成行く譯外を止め、其日はそれで別
はない、何處かに堀殿又はれた、兩人を送り出したの
御合弟達の眞鍋小岩井の道が最早日暮れなるとする
族もあらば、ヤツカ無事に頃、長兵衛の氣象として敬
置くものか、必ず恨みを晴の在家が判つて、其儘便々
らしてやると高言致し居つた、兩人を過す事は成りませ
たと共に會津を立退いた一人早身仕度をして大塚へ出
用儀するが好いとの忠告を向く横り、先には好い案排
受けた事がある、何しろ彼に大川の三五郎を入つた振で
アした亂暴人の上に腕が相三五郎に逢ひに行つた振で
當に出来る、是れは尙當分乗込むには都合が好い、大
其儘に居られた方が安全塚迄は餘程の道のりもある
と思はれるが……長兵衛上野山下から駕籠に乗つて
次郎、前名藤市とは大塚吹雪は垂れをおろして、長兵
上に居住致す、岩附時次郎が付かなかつたが、傳通院

均一賣出し
十銭均一の山
ヤトモツマ
番四一二話電

マルトモ
柴田書店
平町四丁目
電話(五九七)一三(番)
(三三四)一八(番)

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

市原病院
院長 市原卯太郎
平町田町電一四

